様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０６５１

研究課題名（和文）「非病理的解離」のメカニズムの解明―いじめ悪質化との関連から―

研究課題名（英文）The understanding of mechanism of non-pathologic dissociation from the view of the relationship with an aggravated bullying

研究代表者
廣澤　愛子（Hirosawa, Aiko）

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：１０３４５９３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,500,000円、（間接経費）　450,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、病的解離とは異なる構造を有する非病理的解離のメカニズムを明らかにし、非病理的解離といじめ悪質化との関連を検討した。まず、病的解離と非病理的解離の特性を各々捉えた上で、非病理的解離の特性を測る質問紙を作成した。次に質問紙調査を実施し、信頼性・妥当性を確認し、4つの下位尺度からなる非病理的解離尺度を完成させた。非病理的解離が、現代青年の共感性や内省性の乏しさと関連すると共に、病的解離とは異なる構造を有することが明らかにされ、今日的な臨床的問題の解決に貢献できたといえる。ただし、いじめ悪質化との関連については有意な相関は見られず、今後、質問紙を修正して再度調査を行うことが課題である。

研究成果の概要（英文）：This study tried to clarify mechanism of non-pathologic dissociation having a different structure from pathologic dissociation, and examine the relationship between non-pathologic dissociation and an aggravated bullying. After carefully examining each characteristics of non-pathologic dissociation and pathologic dissociation, the questionnaire to measure non-pathologic dissociation was created and carried out. The results showed that the measure of non-pathologic dissociation consists of four subscales,and have sufficient reliability and varidity. Additionally it was clarifyed that non-pathologic dissociation has a relationship with a lack of empathy and self-reflection in the modern adolescent, and has a different structure from pathologic dissociation. These results contribute to the solution of Today's clinical problem. But,it was't cleared that non-pathologic dissociation has a relationship with an aggravated bullying. it was future tasks to conduct a review of it.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：非病理的解離　無関心・無感動　割り切り　内省のなさ　切り捨て　病的解離

１．研究開始当初の背景

外傷体験などによって引き起こされる病的解離については多くの研究がある一方，非病理的解離に関する研究は極めて少ない．しかし，スクールカウンンセリングなどアウトリーチ型の支援現場においては，非病理的解離の広がりが指摘されており，現代青年の内省力や共感性の欠如，さらにいじめの悪質化に結びついている可能性が示唆されている（岩宮,2009など）. アウトリーチ型の支援活動が，教育や福祉の領域で増加傾向にある昨今の現状を鑑みると，本人に来談意思や問題意識がないクライエントへの支援がますます増える可能性があり，そういったクライエントの特性の一つと考えられている「非病理的解離」について明らかにすることは，今日的課題と言える．また，非病理的解離がいじめの悪質化という社会的問題と関連があるならば，非病理的解離といじめ悪質化との間にどのような関係があるのかを明らかにすることは，重要な研究課題と言える.

２．研究の目的

本研究では，以下の2 点を明らかにすることを目的とした.

(1)非病理的解離を測定する尺度の作成

病的解離と非病理的解離の特性の違いを改めて捉え直し，さらに自尊感情や共感性など他の心的特性と非病理的解離との関連性を検討した上で，非病理的解離の構成概念を明らかにする．そして，非病理的解離を測定するための尺度を作成し，その信頼性及び妥当性を検討する.

(2)非病理的解離といじめ悪質化との関係を検討

非病理的解離という心的特性といじめ悪質化との関連を明らかにし，非病理的解離がどのようにいじめ悪質化に繋がるのかの一端を解明する.

３．研究の方法

(1)非病理的解離の尺度作成

以下の手順を踏んで，非病理的解離の尺度を作成した.

①病的解離の特性を改めて捉え直す

事例研究法を用いて，自験例における外傷体験を抱えたクライエントの言動を質的に分析し，非病理的解離との違いを明確化した.

②非病理的解離の特性を捉える

高石（2000），渋川・松下（2010），中塚（2010），岩宮（2009）を参考にし，さらに事例研究法を用いて，自験例において非病理的解離の特性が見られたクライエントの心理療法過程を質的に分析し，非病理的解離の特性を捉えた.

③非病理的解離の尺度作成

①と②を踏まえて，非病理的解離を，「無関心・無感動」「わりきり」「内省のなさ」「切り捨て」の4 つから構成された概念であると仮定し, 38 項目から成る非病理的解離尺度を独自に作成した．この尺度に，GALEX（後藤ら,1999）, 解離性体験尺度日本語版（田辺・小川,1992），自尊感情尺度日本語版（山本・松井・山成, 1982）を加えた質問紙を大学生249 名に行い，その信頼性と妥当性を検証した.

(2) 非病理的解離といじめ悪質化との関係を検討

①いじめの悪質度と非病理的解離傾向との相関

質問紙調査を通して，非病理的解離の程度と過去のいじめの悪質度との相関を検討した.

②過去のいじめにおける感情体験と非病理的解離傾向との相関

質問紙調査を通して，過去のいじめ体験時における感情の程度やその対処方法と，非病理的解離の程度との相関を検討した.

４．研究成果

(1)非病理的解離尺度の作成

①非病理的解離尺度の因子構造の分析

非病理的解離尺度全38 項目について, 因子分析（最尤法・Promax 回転）を行った．その結果，当該因子に負荷の低かった項目（.30 未満）と，複数の因子に負荷を示す項目（.30 以上）を削除し，残った31 項目について，再度因子分析（最尤法・Promax 回転）を行った．その結果，解釈可能性から4 因子を抽出した. 4 因子の累積寄与率は46.79%であった. 回転前の固有値は，第1因子7.029，第2 因子3.308，第3 因子2.431，第4 因子1.738 であった．第1 因子はあらゆる事柄に心を動かさない「無関心・無感動」，第2 因子は物事を割り切って捉える「わりきり」，第3 因子は自己と事象を結び付けて内省することのできない「内省のなさ」，第4 因子は不快に思えることはなかったことにしてしまう「切り捨て」と命名した．因子間相関および下位尺度間相関については，因子間では，r=-.160 ～.393 の相関がみられ，下位尺度間相関では r=.136～. 386 の0.1%水準での有意な正の相関がみられた．これらの結果から，4 つの下位概念は，相互に関連し合いながら，弁別可能であることが示された.

②非病理的解離尺度の信頼性

非病理的解離尺度の信頼性については，尺度全体でα 係数=.733，「無関心・無感動」でα 係数=.847，「わりきり」でα 係数＝.731，「内省のなさ」でα 係数＝.720,「切り捨て」でα 係数=.721 となり，内的整合性という観点からは十分な信頼性を備えていることが確認された.

③非病理的解離尺度と他の尺度との相関

まず，非病理的解離尺度総得点とGALEX 総得点との間について述べると，両者の間には弱い正の相関（r=.266）がみられた．よって，両尺度は弱いながらも関連しているといえる．次に各下位尺度について見てみると，非病理的解離尺度の下位尺度である「内省のなさ」とGALEX の下位尺度「内省困難」の

間に，中程度の正の相関（r=.587）がみられた．このことから，非病理的解離尺度が内省のなさを適切に測定できることが示唆された．

また，「内省のなさ」とGALEX の下位尺度「言語化困難」の間では中程度の負の相関（r=-.397）がみられた．このことから，内省のなさは身体感覚や感情の言語化の困難さにつながらず，むしろ身体感覚や感情を容易に，あるいは安易に言語化することに繋がっていることが示唆された．同様に非病理的解離尺度の下位尺度「わりきり」も，GALEXの下位尺度「言語化困難」との間には弱い負の相関が，GALEX の下位尺度「内省困難」との間には弱い正の相関がみられた．したがって内省のなさと同様に，嫌なことをわりきる傾向は，内省しない傾向を生むことに繋がる可能性が示唆される一方で，身体感覚や感情の言語化の困難さにはつながらず，むしろ容易に（安易に）言語化する傾向に繋がることが示唆された．以上のことから，非病理的解離尺度は収束的妥当性を備えていることが確認できた．

次に，非病理的解離尺度総得点と解離性体験尺度総得点との間には，相関はみられなかった．よって，両者の間には関連はなく，異なる性質のものを測る尺度であることが示された．解離性体験尺度と非病理的解離尺度の下位項目「内省のなさ」の間にきわめて弱い負の相関がみられたが，これは非病理的解離尺度で測定する内省のなさに，病理性が伴わないことをあらわすと解釈できる．以上のことから，非病理的解離尺度は解離性体験尺度と異なる尺度であり，弁別的妥当性を有しているといえる．

最後に，非病理的解離尺度総得点と自尊感情尺度総得点の間に相関はみられなかったものの，下位尺度ごとではいくつか相関を示したものがあった．非病理的解離尺度の下位尺度「無関心・無感動」と自尊感情尺度の間に，きわめて弱い負の相関がみられた．これは，自尊感情の低さと物事に対する無関心・無感動が関連していることを示唆するものである．また，非病理的解離尺度の下位尺度「わりきり」と自尊感情尺度の間では，中程度の正の相関（r=.369）がみられた．このことから，自尊感情の高さがわりきる行為に影響を及ぼしていることが明らかとなった．

④非病理的解離尺度の下位尺度について

以上のように非病理的解離尺度の各下位尺度は，他の尺度との関係からそれぞれ次のような特徴があることが示唆された．「無関心・無感動」はGALEX の下位尺度である「言語化困難」と弱い正の相関（r=.210）がみられ，自らの身体感覚や感情に関心をはらわないという特徴があることが明らかとなった．また「わりきり」は自尊感情と中程度の正の相関（r=.369）があり，自尊感情が高いほどわりきりやすいことが示唆された．つまり、自尊感情の低さが割り切るという態度を引き起こしているわけではないことが明らかになった．自尊感情が高いから物事を割り切って捉えるという主体性を備えている、あるいは逆に、主体的に割り切った結果、自尊感情を高く保つことに繋がっていると言える．

次に「内省のなさ」は，GALEX の下位尺度である「言語化困難」と中程度の負の相関がみられ（r=-.397），身体表現性障害のクライエントに見られる，身体感覚や感情の言語化が困難であるという特徴とは反対に，身体感覚や感情の言語化はむしろ容易に（安易に）行われているが，そこに内省性は含まれておらず，じっくり内省したり考えたりすることがないままに，安直に自分の感情や思考を表出してしまうといった特徴を有する可能性が明らかになった．最後に「切り捨て」は，どの尺度とも相関がみられなかった．「切り捨て」を構成する項目内容や項目数が妥当であったか，今後さらに検討する必要がある．これらのことから，様々な出来事を自己に結びつけて葛藤や内省を経て対処していく傾向の有無を，非病理的解離尺度では測定可能であることが示唆された．

(2)非病理的解離といじめ悪質化との関係

いじめの悪質度と非病理的解離尺度の尺度得点との間には有意な相関が見られなかった．また，いじめにおける感情体験と非病理的解離尺度との尺度得点との間にも有意な相関が見られなかった．これは，本質問紙においては，過去のいじめについての悪質度及び感情体験を今現在尋ねており，いじめの悪質度及び感情体験を適切に捉えることができなかったのではないか，と推測される．今後，研究手法を改善・工夫して，再度調査を行うことが必要である．

(3)今後の課題

①信頼性及び妥当性のさらなる検討

本研究では非病理的解離尺度の信頼性に関して，α係数を算出し，内的整合性の面からは十分な信頼性を有していることが確認された．しかし，再検査法による継時的安定性の確認は行われていない．

また，非病理的解離尺度の妥当性に関して，GALEX にみられるような言語化困難，内省困難との収束的妥当性，解離性体験尺度における病的解離との弁別的妥当性を検討した結果，それらを備えていることが明らかとなった．しかし，非病理的解離尺度の基準関連妥当性に関しては何も行われていない．継時的安定性および基準関連妥当性の確認を経た，より信頼性と妥当性を高めた精緻な尺度の作成が今後の課題として挙げられる．

②非病理的解離といじめ悪質化との関連

本研究においては，非病理的解離の程度といじめの悪質度との間に有意な相関が見いだせなかった．これは，過去のいじめ体験を現在扱い，その感情体験などを分析対象としたためと思われる．今後は，過去のいじめ体験ではなく，比較的最近のいじめ体験について問うことも視野に入れて，調査対象者を中学

生及び高校生にすることも検討する．但しこの場合，比較的最近のいじめ体験について問うことが，被験者の心理的苦痛に繋がる可能性があるため，いじめの被害者や加害者は調査対象から外し，傍観者や観衆といった立場の人のみを調査対象とするなど，何らかの配慮が必要と思われる．いずれにせよ，倫理面に十分配慮し，被験者の負担にならない調査方法を選択する．また調査の際，質問紙調査のみならず面接調査など質的な研究手法を用いることも検討している．つまり，体験の質的な側面を丁寧に深く捉えることによって，非病理的解離傾向といじめ悪質度との関連を浮き彫りにしたいと考えている．

③非病理的解離と発達障害との関連

発達障害の特徴の一つに主体性のなさが挙げられるが（河合, 2010），これは非病理的解離の特徴と共通するものである．発達障害でみられる主体性のなさや内省のなさ，共感能力の欠如は，相手の立場に立って考えられない対人関係の困難さにつながる．岩宮（2009）は, 主体性のなさ, 葛藤のもてなさ, 共感能力の欠如, 関心の偏り, 自責感のなさ, 他罰的といったことから起こる問題は，発達障害と結びつきやすいと指摘しており，非病理的な解離傾向の高さの中には，発達障害がひそんでいる可能性があるといえる．発達障害と非病理的解離との関連について，今後の検討が必要である．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①廣澤愛子(2014)，「被虐待児・者に対するイメージを用いた心理療法の支援効果の機序の検討―外傷体験の語り，イメージの作用，及びCl-Th 関係に着目して―」，『心理臨床学研究』，査読有，vol.32(1)，39-50.

②廣澤愛子(2011)，「コラージュ療法の治療的特性について―『螺線的な心理療法過程の促進』という視点から―」，『箱庭療法学研究』，査読有，vol.24(1)，67-82.

〔学会発表〕（計 3 件）

①Aiko Hirosawa, Tomohiro Takezawa, Sakiko Ogoshi, Influence of the attitude of workers on independence and sociality of children with developmental disorders in small group activities, Journal of Policy and Practice in Intellectual Disabilities, 査読有，10(2),129. IASSID 3rd Asia Pacific Regional Conference, August, 22-24, 2013. University of Waseda.

②Aiko Hirosawa, Masafumi Ohnishi, Miku Sasahara, A Study of School Volunteer Programs by Non-specialists (University Students)(2):Features of cases where programs functioned effectively,16th European conference on developmental Psychology,査読有,116. September, 3-7, 2013. University of Lausanne, Switzerland.

③廣澤愛子　イメージを用いた心理療法における「外傷体験の語り」の特性－被虐待体験を抱えた人の「語り」に焦点を当てて－，日本心理臨床学会第31 回大会発表論文集,355. 2012年9月14-16日. 愛知学院大学日進キャンパス.

〔図書〕（計 0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者

廣澤愛子（HIROSAWA , Aiko）
福井大学・教育地域科学部・准教授
研究者番号：10345936